

令和六年能登半島地震に思う

鹿谷 雄一

元日、高齢化・過疎化が進む能登地方を最大震度七の地震が襲った。

これまでの震災の経験から対応できたことがある一方、新たな課題も浮き彫りとなった。地域の自治力低下が顕在化し、地盤変動・隆起、公費解体の手續きの遅れ、ライフラインとりわけ上下水道の長期寸断は、生業再建や住民生活に多大な影響を及ぼしている。

高齢化率との関係が指摘される住宅の耐震化率の低さがあり、二〇〇七年地震、二二年末からの群発地震と二三年地震でダメージを受けて弱っていた古い建物は長周期地震動に耐えきれなかった。社会福祉法人が提供した送迎車のドライブレコーダーの動画は、発災の瞬間だけでなく、その後の津波も映している。深夜早朝で、積雪があったら、より甚大な被害となっていたことだろう。

能登南部の邑知平野（羽咋市・七尾市間）より北の海岸線は、砂地と海岸段丘・傾斜地が多く、少ない平地に人口が集中している。能登北部（奥能登）とつながる主な道路は、能登半島を一周する国道二四九号線（外浦・内浦）と自動車専用道のと里山海道（丘陵）である。この三ルートの各所で被害があり、生活や復興支援活動の支障となっている。

能登半島はもともと狭いところで一〇キロ

強である。この外浦に原発が立地する。三〇キロ圏には能登島までが入るが、この圏内に孤立集落が発生した。原子力災害との複合災害となった場合、南北の陸路移動ができなくなる。また、大規模な地盤隆起では海上避難も難しくなる。半島の成り立ちは世界農業遺産・能登の里山里海と関わる。これを理解していれば地盤隆起を「想定外」とされることはないであろう。

震災後、能登地方に所用で三回訪問した。二月下旬、能登南部に入るとブルーシートが目立ち始める。行動した範囲では古い建物が多いが、傾きはあるものの倒壊の建物はなさそうだった。自治体庁舎周辺は、地面が波打ち、河川護岸が崩れていた。

GW二日目。宿泊先の金沢市から能登へ向かうと、のと里山海道はボランティアや自宅・親類宅へ向かう車で金沢市内と変わらないほど混雑していた。

GW最終日。二〇〇七年地震でも被害を受けた輪島市門前地区を経由して地方創生臨時交付金で設置して話題となったイカキングマで足を運んだ。門前中部の被害は甚大だった。休日のためかGW最終日のためか、静かで、ボランティアもあまりみかけなかった。

防災力が低下していることは否めない。

福祉避難所はほぼ開設できなかった。また、発災時、祖父（関東大震災前の幼少期に東京から移住）を避難させようとしたところに二回目の揺れが襲った。要支援でないが、ガード付きベッドで横になっていたため外に出るだけで思いのほか手間取った。両親だけではさらに時間を要したことだろう。

被害が大きかった三市三町のうち、珠洲市と穴水町を除き平成の合併を経験している。総務省の「地方公共団体定員管理調査」で二〇〇六年四月と二三年四月の一般行政職を確認すると、三市三町あわせて二四一人減少（減少率二四・〇％）している。また、対口支援で一日当たり最大一二六三人だった職員派遣も順次終了し、長期派遣へ移行している。要請した人員を確保できず、公費解体に関わる職員や保健師が不足しているという。

思いがけない再会もあった。同級生の自治体職員が復興に向け奮闘・苦悩している姿がテレビに映し出された。他の自治体では防災担当職員もいる。議員もいる。落ち着いたところに経験を聞きたいと思う。

道内にも道路の寸断で孤立する可能性の高い地域がある。冬季の複合災害を想定する必要がある。これまでの経験を踏まえつつ、さまざまな事態を意識して、限られた資源で最善の方策がとれるよう社会全体の意識を高めていく必要がある。

「能登はやさしさや土までも」「我慢強い」と言われる風土である。能登の里山里海にある五感に響けしきは、震災を超えて、より強く感じるものとなるであろう。

へしかたに ゆういち・北海学園大学法学部教授